
「勇敢な男」

望月愛太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「勇敢な男」

【Nコード】

N4210P

【作者名】

望月愛太郎

【あらすじ】

僕はいつものように学校に向かおうとしてた。

しかしそこでトラウマになるような光景を目撃する。

僕はいつも電車に乗って学校まで向かう。学校は九時から始まるから朝は大変だ。七時半頃には起きて八時十分の電車に乗らなくてはいけない。その日も僕は学校に向かう用意をしていた。朝食を急いで食べ、鞆の支度をし、玄関に出た。

「行ってきます」

母に声をかけ、外に飛び出した。歩く僕の後ろからは、母の「いつてらっしゃい」という声が聞こえていた。

僕は駅で八時十分の電車を待っていた。駅は会社に向かうサラリーマンや学生で混んでいて、僕も列の一つに並んでいた。今日の日直は僕だったかな、と考えているとふと、近くにいる小学生に気付いた。

その男の子はランドセルを肩からはずして中を必死にあさっていた。忘れ物に気付いて慌ててるのだろうかと思ったが、同時にその子が黄色の線のところにいたので、ちょっと危ないなと思った。

小学生から目を離して前を見ていると、突然、驚いた声が聞こえた。見るとさっきの子が線路に向かってバランスを崩しているところだった。男の子の近くにはケータイをもった若い男がいて、その男が男の子にぶつかってしまったようだ。

男の子はそのまま線路に落ちてしまった。ホームいた乗客はみな驚いて、その男の子のほうを見ていた。僕ももちろん見ていた。どうしよう、大丈夫かな、と焦った。

ホームから線路のほうに身を乗り出すと男の子が起き上がっているのが見えた。特に怪我はしていなかったようだ。しかし男の子もど

うしたらいいのかわからず、周りを見渡していた。

そのとき鋭い汽笛の音が響いた。

僕は振り返った。駅から百メートルほど離れたところを電車が走っていた。僕が乗ろうとしていた八時十分の電車だ。電車は汽笛を鳴らしながらかなりのスピードで駅に近づいてくる。

どうしよう、男の子が轢かれてしまうんじゃないか。僕はその光景を想像して怖くなった。でも同時にこれが本当に現実なのか、という現実感の無さにも襲われた。あまりにも唐突で、あっけない出来事だったからだ。何かしなくてはと思ったが、ホームから男の子のいる線路までがものすごく遠くに感じられた。

その時、僕の後ろから一人の男が飛び出した。僕と同じぐらいの歳の黒いシャツを着た男だった。その男はホームの端まで行くと、こちらを振り返った。

「誰か、非常停止ボタンを押してください」

そう言うと男はホームから飛び降り、男の子のほうに向かった。

はらはらしながら見守る僕の前で、電車のスピードが落ちた。誰かが黒いシャツの男の指示に従って、列車非常停止ボタンを押したのだ。しかし電車はもう黒いシャツの男と男の子のすぐ近くまで来ていた。電車が通過し、二人の姿が見えなくなった。周囲から悲鳴が漏れた。二人は轢かれてしまったのだろうか。

そしてようやく電車は止まった。

この事態を知って、すぐに駅員がホームに走って現れ、対応し始めた。不安と興奮、そして野次馬根性で口々に話す乗客たちに静かにするよう注意し、二人がどうなったか確かめた。

駅員が声をかけると、元気な男の声がした。黒いシャツの男の声だ。二人はとっさにホームの下の避難スペースに入り、無事だったらしい。

そのことが駅員によって乗客に伝えられるとホームに満ちていた緊張や混乱が薄れていくのが感じられた。僕も二人が無事だと知って、ほっとした。惨い事故を見なくてよかったと思った。緊張の糸が解けて、崩れそうになった。

しかしそれだけではなく、僕の目には線路に飛び込んだ男の姿が焼きついていた。どこにでもいそうな男で年齢も僕より二つか三つぐらい上にしか見えなかった。

黒いシャツの男が泣いている男の子を連れてホームに上がってきたのは、それから十分ぐらい後のことだった。もちろん、その間電車は動かず、結局、動いたのは安全が確認された電車が止まってから二十分後だった。そのため今日は学校に大幅に遅刻した。

夜、寝る時間になっても僕は目を開けていた。暗くなった自室とその天井が見える。しかし僕は違うものを見ていた。それは今朝見た、小学生の男の子を助けるために線路に飛び込んだ黒いシャツの男の姿だった。

なぜあの男はあんな行動が取れたんだろう。自分が死ぬ可能性は考えなかったのか。どこにそんな勇気があったんだろう。

しかし何度思い返しても黒いシャツの男は特に変わった服装でもなく、ホームに戻ってから見せた表情も、ごく普通の人間の表情だった。

もし、同じような場面に出くわしたとき、今度は僕があのような行動を取れるだろうか。そればかり僕は考えていた。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4210p/>

「勇敢な男」

2010年12月11日01時59分発行